

共生・平和フォーラム2007

第1部 平和講演

講師 大野 元裕 氏

テーマ 「平和を考える～中東の現状から～」

ご紹介いただきました、大野でございます。本日は「共生・平和フォーラム2007」にお招きいただきありがとうございます。今日は、皆さんと一緒に「平和を考える」ということで一時間二十分ほどお話をさせていただこうと考えております。

先程、司会の方からご紹介をいただきましたとおり、中東に関することを専門としております。そうとう遠い世界ではありますが、十三年程中東におりました経験がございますが、その中には「イラク」、「シリア」など怖いイメージのある国もありました。

みなさん、「拷問」はご存知ですか？「拷問」が流行っているというか、そのような国で、かつてイラクに住んでいたときに「拷問の極意はなんですか？」と聞いたことがあります。そうすると向こうの方から、「拷問の極意というのは、人間が自然にしたいこと、例えば『食べたい』、『眠りたい』ことをやらせないことが、一番効くんだ」と聞いたことがあります。

さて、今日はお休みの土曜日でございます、そして丁度みなさん、お昼ご飯を召し上がった後だと思えます。人間の自然の摂理としては丁度眠くなる時間ですので、こんなときに私の堅い話は拷問に等しいものになってしまうかもしれませんが、できればリラックスしていただき、話の中身は堅いですが、ゆったりと聞いていただきたいと思います。今日はよろしく願いいたします。

まず、今日は「平和を考えたい」ということなんですが、確かに日本は、第二次世界大戦が終わってから、あれ以来、日本を領土とする戦争に直面したことはありません。ある意味では平和の中にいたのかもしれませんが。

「平和である」というのは私たちの当たり前願いです、「平和がない」、「平和を求める」と言い続けていても、世界中が必ずしも「平和でない」ということも、また、事実です。そんな中で、我々は「不安定」、「戦争」ということを考えずに「平和」について語るができないのではないのでしょうか。つまり、「平和、平和」というだけでなく、「なぜ、不安定なのか」、「なぜ戦争が起きるのか」を考えなければならないと思います。

その意味で、私が大変残念なことは、私が専門としている「中東」或いは「イラク」という国々は、大変残念ながら「戦争」や「不安定」の大変残念ですけど、宝庫でございます。そこで、中東やイラクにおける経験、もしくはそこで考えたことを皆様と共有させていただくことによって、もう一度平和の意味というものを考えていきたいというのが今日のテーマ。かつての「戦争」や「平和」という概念はもしかすると現在の概念と違っているかも知れません。そのあたりを考えさせていただきたいというのが今日のテーマでございます。

さて、ここに「戦争は社会に何をもたらすのか」と書いてありますが、ついこの前の戦争です

と、アフガニスタンでの戦争、或いはイラク戦争を思い出してください。あの時に我々は、世界の名だたる人物が、例えばブッシュ大統領が「テロリストがいるのだ、彼らを封じ込めるために戦争が必要なんだ」と言う。ところが、戦争が終わった後の方が、なぜか世界が混乱している。例えばちょうど今、アフガニスタンで韓国人が拘束されていますね。あんなことが起きるとするのは、どうも「戦争」が起こっても「平和」になったとは限らない。それどころかもしかすると「より不安定」になっているかもしれない。そして更に、我々は十年、二十年前に「テロ」なんていうのは遠い世界の話であったのが、ところが最近では、お隣の韓国人が拉致され、イギリス、アメリカ、そして一部では日本人が人質になる事件が、世界のどこかの地域で起こってしまうような状況に直面しています。現在は、もしかすると我々にとってやさしくない「不安定な世界」であると言わざるを得ないのです。

ここでちょっと話を始める前に、例えば我々がよく言います。「アメリカが悪い」、「イラクが悪い」。またその時によく言います。「国連に任せればよいのだ」。ところが私も、ずっと外交に関わっている者にしてみれば、国際社会というのはオオカミやライオンがたくさん住んでいるジャングルのようなところで、そんな中で「国連」というのは、例えば正規の警察とは違います。「国連」というのは各国が寄せ集まった組織でしかない。つまりそれぞれの国が利益を追い求める。そういう人たちが集まっただけの組織です。ある意味、イラクがクウェートに侵攻した際には制裁がかかった。しかし、アメリカがイラクに戦争を起こしたときには、誰も処罰しない。どちらが正しいかは別です。ただ、戦争を起こしてもその結果が違う。例えば、こちらでは北朝鮮やイスラエルが核を持ったといいます。こちらではイランが核を持ったとは一言も言ってない。平和的な核利用をしたいといえども、核兵器を持つ疑いがあるだけでも制裁がかかる。どうもアンバランスな状況が出ているのが国際社会の現実としての姿である。そうした中で、世界がどう動いているのかよくわからない。また、かつてと違って「非対象的な脅威」…「非対象的な脅威」というのは、どういうものかという、例えば昔の戦争であれば日本と中国。アメリカと日本。このように国同士が、前線があっつぷつかるような戦争が主でした。ところが今では、国ではない組織…例えばアルカイダって聞いたことがあると思います。こういう人たちが、国や、あるいは民間人を相手に「不安定」をもたらす。これを「非対象的な脅威」というふうに呼んでいます。かつて国は暴力装置を独占していると考えられていました。警察・軍隊等。ところが今や、国以外がRPG爆弾、あるいは仕掛け爆弾そ

んなものを持って脅威をふるう。これが冷戦以降の特徴であります。こんなことを我々は新しい脅威として対処しなければならないが、よく考えたことがあるだろうか。テロってなんだと思いますか？「いや、わけわかんない人たちがわけわかんないことをしている」。だけど、それだけではない。被害にあって、「仕方がなかったよね」では話が終わらない。そこで、少しテロについても考えてみたいと思います。



さて、本題に入る前に、実はイメージの問題というものがあります。これは「テロ」「中東」「イスラム世界」もしくはアメリカに対しての渡航者…我々は必ずしも正しい認識を持っていないという風に考えざるを得ないところがあります。イメージの問題というのは我々の「命」・「安全」にもかかわるという話であります。例えば、私が研究対象としている「中東」という場所があります。この右側の地域に「イラク」という国があります。イラクに行ったことがある方はあまりいないと思いますが、どういうイメージですか？「イラク」とか「中東」とか「イスラム」と聞いたときに皆様の頭の中に浮かぶのはなんでしょう。暑い砂漠の上を、お化けみたいな格好をした人がらくだの上に乗っている…こんなイメージでしょうか。あるいは、よくわかんないけど、狂信的なイスラム教徒が周りにいて、外国人を捕まえて殺している…こんなイメージでしょうか。ところが、必ずしもそれが全て正しいわけではありません。たとえば、暑い砂漠の国がある。確かにイラクのこのあたりは砂漠で、南のほうに行くと「バスラ」という街があります。バスラといわれても、皆さんよくわからないかと思います。バスラという街は、子どもの頃に「シンドバットの冒険」というのを読んだことがあるかと思います。あのシンドバットが走り回っていた港町がバスラです。ここは、世界最高記録の気温を出したところですよ。62度です。私も50度を超えたくらいの時は経験したことはあります。皆さん手を触っていただくとだいたい手のほうがあったかいと思います。大体普通の方はあったかはずなんです。ところがこれが50度の世界に行くと違うんです。手がひんやりします。ここは今、26～7度だと思います。自分の体温は36～7度です。つまりちょっとあったかい。ところが50度の世界ですと、手を触るとずっと冷たく感じる。常識がひっくり返ってしまうような場所でもあります。つまり、「イラクは暑い」。これは事実ですが、一方で、北のほうに1000メートルくらい山々が連なっておりまして、2メートルくらいの雪が降っています。そうすると、「イラクは寒い」も正しいんです。こういった誤解を我々は持っています。つまり暑いだけでなく寒いところもあるということを知らないわけですね。外国の人が日本を正確に知らないということはよくありますね。私も少し前、エジプトに行った時に、運転手に、「私は日本人が大好き。ブルースリーもジャッキーチェンもすごい」と言われたことがあります。そのぐらい理解が違うわけです。去年ドーハというところでアジア大会が行われました。私があそこに住んでいた時に、オウム真理教のサリン事件が起きました。その時に私の友人が慌ててやってきて「大野大変だ！テレビ見たか！日本中がサリンだらけだ！」…笑いますけど、そんなことないですよ。あれはある特定の時間に、特定の場所で、特定のグループがサリンを撒いた。しかし、テレビや新聞だけを外国で見ていると、なんか日本中サリンだらけに見えちゃうんです。これは逆もまた真で、私たちが中東の映像や写真を見るとき頭に浮かぶのはどうでしょう。テロによって破壊された車・拘束された人質…こんなものばかり見ていると、中東ってテロリストにみえてしまいます、こういう誤解も事実だと思います。その辺に遊牧民は駱駝に乗っています。それは事実です。日本において、「またぎ」とか「芸者」という人たちがいるのは事実ですね。しかし、日本中みんなまたぎや芸者ばかりではないこともまた事実です。その程度の認識だという風に考えていただいていいと思います。た

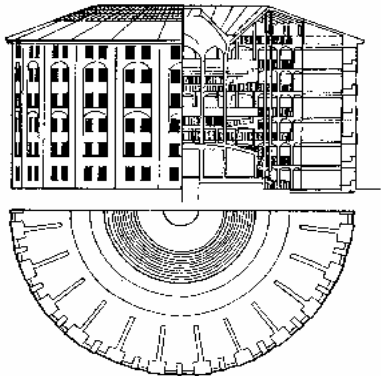
だ、そういった一方的なイメージばかりではどんどん危険になる。先ほど、韓国人23名がアフガニスタンで拘束されたという話をいたしました。実はアフガニスタンで基督教の施設は異端、あの韓国人は基督教の関係者ですよね。もちろん、人道支援で行っているんですけど、実はこれ、イメージとしては危険なんです。どういうことかということ、我々がアフガニスタン戦争をテロに対する戦争だと思っている。しかし、アフガニスタン人の中には、あの戦争は、基督教徒が布教のためにイスラム教国を侵攻したと考える人たちが、特に田舎のほうに行くことが多いんです。そんな中、バスに乗って、ベールも被らずに市場で記念撮影をした若い女性たちが主体の23人が基督教徒の施設に立ち寄ったというのは、確かに記念撮影している人は平和に思っているかも知れませんが、相手側からどう映るか。相手の意見に立つということから考えると、彼らの偏見は、日本人も、その偏見がある意味で危険に作用してしまう。これが今回の韓国人人質事件の遠い原因の一つであることは的外れでないだろうといえる。また、しばしばこの一方的なイメージが先行し、立派な学者の先生でも「いやあ、イラクというのはずっと長い間宗派対立が起こってきた。こういう宗教戦争は怖いよね」とおっしゃる。私は全然逆の立場なんです。歴史上、宗教戦争ってほんとは無かったんじゃないかって言うのが私の意見です。つまり、政治が先に立って、その上に宗教が利用されることによってきわめて強固…どんな宗教でも広く受け入れられてる宗教は、相手がただの宗教では無いんです。そうではなくて、政治・利益こういったものが宗教を凌駕するのが今の危険性です。また、イラクは宗派対立があり、ずっと殺し合いが続いている。それは明らかに嘘である。かつてイラクは、少なくとも私が知る限り、宗派が違うという理由で殺し合ったということは、この戦争の前には無かった。要するにそれはサダムフセインが強権的に訴えたから。そうじゃない、その前からそうだった。スンニ派の旦那さんとシーア派の奥さん、基督教徒の旦那さんとクルド人の奥さんが一緒に生活している。何十年も人々にとって当たり前の光景だった。それがこの数年間で覆ってしまった。これはまさに政治的困難と言わざるを得ない。従って我々は、一方的なイメージだけで判断してしまうと、どうも間違ってしまうことが多そうです。決議式の中で前回は戦争を放棄しました。「新しい恐怖が悪い」「テロが悪い」「我々が正しい」「だからあの国は潰さなければいけない」と多くの方が思ってしまうことでもあります。もちろん、時に武力が必要な時があるかもしれませんが、しかし、一方的な理解だけでは何も生まないことは事実です。ここで「全てアメリカが悪いんだ」私が言って、それで話が終わるわけではないんです。いろんな意味で、いいところも悪いところもあって、そのダイナミズムが国際政治と安全保障を作り上げていると思わざるを得ないし、「一方的に正しい」「一方的に悪い」という風に簡単に判断することはできないのではないかと思います。そんな中で、テロが非常に厳しいものになっている。

今、新しい脅威として出てきているものに「核」「ミサイル」「テロ」があります。今日はその中の「テロ」の話をしたいと思います。テロは今までと全く違うタイプの脅威です。まず第一に、「前線」がないということ。戦争は一般論で言うと「前線」というところでにらみ合っています。よってここから遠ければもう安全なはずなんです。あるいはそこから遠いところにいる民間人はも

っと安全なはずなんです。ところがテロは一転、国境を越えて、戦闘員であろうが無かろうが、民間人まで巻き込む。前線なんてどこにあるのか分からないのに、突然、ニューヨークでボーン、ローマでバーン。これがテロであります。またさらに、伝統的な安全保障のラインが効きません。安全保障の最も代表的な理論としては「抑止」という概念があります。「抑止」わかりますか？例えば、アメリカとソ連で、アメリカはたくさん核を持っています。ソ連もたくさん核を持っています。アメリカがミサイルを発射すると、それを受けてソ連がミサイルを打ち返します。双方、お互いが全滅する程度のミサイルを持っているんです。だからどっちも撃たない。お互いが似たようなレベルだったら、どっちも撃たない。これが「相互抑止」もしくは「MAD」相互確証破壊といわれる抑止の範囲。ところがこれには前提があります。こっちも死にたくない。でも相手も死にたくないと思っているはずだからお互い撃ちませんよねという理性がこの前提にある。しかし、テロリストはどうでしょうか。「自爆テロ」…自分から死にに行くのが自爆テロですので、当然抑止が効くわけがない。全く違う類のものが生まれてきました。そうかといってアメリカというのは対テロ戦争を「予防戦争」と位置づけています。それはどういうことかということ、普通は戦争というのは、今の読解力では、侵略戦争というのは出てこない。そうではなくて、相手から攻撃を受ける。もしくは受けそうになっている時に行うのが「防衛戦争」と呼ばれている。ところが予防戦争というのは、「あいつらはきっとそのうち我々を潰すかもしれない。攻撃するかもしれないからその前に叩きのめしておく。」それが予防戦争。お互いにテロリストがらみ、対テロ戦争をやっている側も、もしかすると若干行き過ぎている。もしくは行き過ぎてないにしても、相手をきちんと分かった上で、それしか方法が無いというところまで来ているかどうかというのは、若干自分が思うところでありませぬ。

そんな中で、テロがどのようにして生まれてきたかという話を、ちょっとイラクを例にお話をしたいと思います。イラクに戦争が起こりました。我々がよく知っているのは、サダムフセインというよくわけわかんない人がいた。とんでもない。それを潰した。話はめでたし、めでたしで終わるはずだったのが、なんかよくわかんない。アメリカが悪いんだかイラク人が悪いんだか分らないけれども、混乱している。そのようなご理解の方が多いのかもしれません。しかし、戦争が起こるときには、確かに、F-16、ステルスそういった兵器も大事かもしれませんが、それよりも大事なことは、「そこに人間が住んでいる」「社会が存在した事」を忘れてはいけません。一方的に攻撃されたからといって、人々が全てに従順になるとは限らない。そこでイラクではどんなことが起こったか。一つは、「恐怖政治」。恐怖政治って分かりますか。言うことを聞かなければ殺されちゃう。例えば、サダムフセインという人は、演説が趣味でした。自分で演説を書くんですね。で、演説をする前に、テレビなどで2・3日前に予告をしたんです。何月何日からありがたい演説をします。そうすると、皆これを見なきゃいけない。さて演説をします。次の日学校で、「皆、サダムフセインの演説を聴きましたか？聴いた人？」。だいたい手を挙げます。手を挙げない人に「君、何で演説聞かなかったの？」その子が言いました。「お父さんが、あんなくだらない演説聴かなくていいって

言ったんです」。そうすると次の日。その先生は、それを秘密警察に密告し、そしてお父さんは刑務所へ。そして新聞にはでかでかと「あっぱれ！小学3年生。非国民のお父さんを訴えた！」こんなことをしていると、家では「サダムフセインのばかやろー」なんて絶対言えない。これが、恐怖政治。

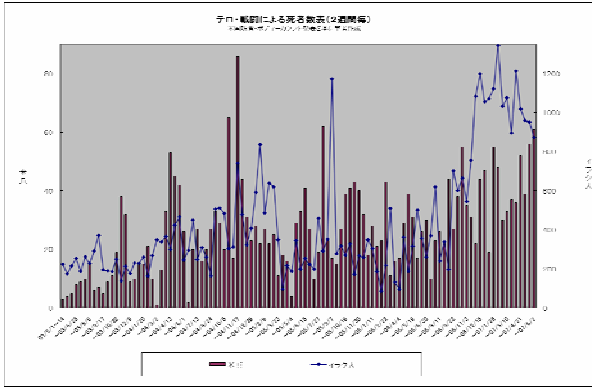


これが(スライドを指して)ヨーロッパで編み出されたイギリスの20世紀初頭の監獄の写真なんですが、パノプティコンといいます。建物の中心に監視の人がいて、その周りに独房(囚人が入れられている)が配置されています。独房には24時間明かりが点いている。逆に監視の人の部屋は真っ暗です。つまり、監視者から独房はよく見えるが、囚人からはいつ監視者が見てるか見てないのか分からない。そうすると収監されている人はあたかも24時間監視されているように振舞わざるを得ない。これがまさに究

極の恐怖政治のシステムとして、しばしばパノプティコンと呼ばれておりまして、これは別に奥様が、浮気の監視をするのにあまり足しになるかどうかはまた別のお話でございますが、ある意味できわめて厳しいシステムでございます。こういうものがありました。

また、独裁者として、国家の象徴になる。「宗派や民族はなしですよ。俺がイラクの象徴だ！俺に従え！」。そして戦争が起こりますと、それがまず全部なくなっちゃう。きわめて簡単なことが起こります。まず、第一に、この独房に入れられていたはずのイラク人…国全体で監視されてたわけです。この人たちが開放される。つまり、今まであたかもサダムフセインに従順だった人たちが自由になる。そして二つ目に国家の象徴が断つとき、みんなは自分自身が持っている価値観…例えば、「私はクルド人だ」「私はスンニ派」「私はシーア派」「もう国じゃない。」こういう状況に、戦争と同時に陥ったわけでありまして。そして、この中央政権に代わる人たちは結局今に至り、今政府があります。首相もいます。大統領もいます。私は実はイラクの首相・大統領が、昔の知り合いなんです。基本的にはそんなにカリスマ性も無ければ、アメリカの力がないといられないんです。そんな人たちなので、人々はあまり相手にしない。アメリカはアメリカで間違えた。第一点目には、アメリカが旧反対派だとして、昔サダムフセインに反対していた人たちが首相になる。大統領になる。政権をとる。そして二つ目には、アメリカが必ずしもイラク人に好評じゃない、あるいは大きな不安を、親戚がアメリカ人に殺されたりするとそれが反米感情となって、こちら側で「アメリカとんでもない」と宗教対立やテロリストがいると、だんだんなびいてしまう。そして三つ目に、伝統的な価値観というものが徐々に徐々に強くなっていったわけですが、その上にアメリカが大きく間違えたものは「サダムフセインはとんでもない」。ではなく、「サダムフセイン的なものは全部ダメだよ」って。つまり、強力な中央集権、政府はダメ。治安を安定させている「軍隊」「治安機関」じゃあ解散しよう。国の中心を担っていた役人の人たち全部だめ。これで結局国がばらばらになっちゃった。戦争が起こった結果、社会、政府がばらばらになってしまったというのが、イラクの今日。戦争が起きるといのはね、悪いやつをやっつけるだけではない。国や社会の安定したシステ

ムをぼろぼろにしてしまう。というのがイラクの今。そんな結果、イラクはどんどんどんどん悪化していきわけですけど、対テロ戦争といいました。イラクはとんでもないと言われて、1990年、イラクに国連の経済制裁がかかった。それから13年間、2003年にイラク戦争が起きた。とんでもないといわれたこの13年間のイラク。イラクの政府が関係したことを証明されているテロで殺された外国人の数はどのくらいだと思いますか？サダム政権によって殺された外国人の数は0です。13年間で0です。ところが、戦争が終わって以降、アメリカの兵隊だけで、約3,700名



が殺されました。戦争が終わった後の方が、おかしくなっている。安全ではない状況になっているのではないかと思わざるを得ない。これがグラフにしたものですけど、赤い棒線はアメリカ兵が死亡した数、青い折れ線はイラク人の死者数を表しています。見てもらうと分かる通り、とんでもない状況だ。そんな中で、ちょっと今日はテロリ

ストの特質を見てみたいんですけど、2週間ごと、2003年5月1日、イラク戦争が終わったと思われた頃、数週間前からみると、状態悪くなってますよね。安定の方向に必ずしも向かっていないんですよ。何度も何度もアメリカは、掃討作戦を行っている。この掃討作戦というといくつか分かってくることがあります。テロリストの特性。まず、第一に、テロリストは卑怯者。どういうことか。強いものには弱い。弱いものには強い。これがテロリストの特性。例えば、この赤い棒線グラフを見てみると、山が…つまり、このアメリカの兵隊さんがたくさん死んでいる年、どんなことが起きていると思いますか？掃討作戦が起きています。アメリカ兵は、戦うために前に出ます。そうするとアメリカ兵側も殺される。これはまあ、ある意味、戦争問題かもしれません。ところがそのあと、だいたい掃討作戦のあと、ポーンと大きく波がある。つまり、一定の効果があると考えていいのですが、この効果が長続きしないで、どんどん悪くなっていくといえると思います。それからもっと大事なことは、この赤い棒線グラフの谷を構成しているところで青いイラク人の構成、イラク人の死者数が跳ね上がる傾向にあるのがお分かりになるでしょう。これどういうことかという、まさにこれがテロリストの特質。テロリストは、アメリカ軍がやってきて、万全の態勢でやってくるとそれを迎え撃つ、背後から、正々堂々と戦うということをしなない。彼らは逃げます。四方に散開して、そして、そこでアメリカ兵を殺したいのかもしれませんが、アメリカ兵は万全の態勢をしている。その代わりに、多国籍軍、他の国の人たち、イラク人を殺す。そうじゃなければ、パイプラインとか…これがテロリストの習性…つまり弱いものには強い。とお考え頂いていいと思います。では、もうひとつ分かっていること。日本の方々に関して、イラクで被害にあっておられます。以前の人質は、必ずアメリカ軍が掃討作戦をやっている時に、2003年の11月、奥、井ノ上両大使。それからこのあたりが、5月橋田信介さん・小川功太郎さんを殺した。2004年4月、5人の日本人が人質として拘束された。その翌月、香田証生という方が首を切られて死んでい

た。それから齋藤さんが、2005年5月被害にあっている。日本人の方が被害にあっているとき、必ずと言っていいほど、掃討作戦が行われているというのは、もしかすると偶然ではないかもしれない。つまり、テロリスト達が、アメリカ兵に代わるいい標的を探すような時に日本人が被害にあっている。それを我々覚えておかなければいけないのは、「日本人は平和を愛する国民」といついっても、テロリスト側から見れば日本人はいい標的になっている。ということを示しているように思える。先ほどの韓国の人質もそうです。キリスト教徒は平和を愛する人。彼らは人道支援のミッション。相手から敵対的に取られるわけでありませう。これが我々日本人に対する、テロリストの見方だと思つて、おそらく間違いはないでしょう。と思つております。

さて、このようなお話ではありますが、アメリカはテロリストを抑えるため、一生懸命何度も何度も掃討作戦をしている。しかし、結局、失敗に終わつてしまつているのが今の現状であります。どうやったらテロは封じ込めることができるのか。アメリカは疑いもなく、世界最高の軍隊。そのアメリカが、武力でテロリストを抑えられないのに、他の国にテロを抑えることはできないのは、自明の理であります。ただし、それは軍事力を使った話。我々は、テロリストを集められたら、殺されて仕方がない。残念でしたね。という以外に、他に方法がない。

そこで、少し見てみたいんですが、実は私は、「テロリストの作り方」というものがあると、テロリストには、「テロリストを作るレシピ」というものがあると思つています。そうだとすれば、その作り方と逆のことを、あるいは少なくとも、そういう方法があれば一番効果的だと思ふ。そしてそれは、必ずしも軍事力だけに頼るものではないように思つております。

これは、私自身、「恥」のお話でございますが、ちょっと今日はその場限りということでお話をさせていただくと。私は「シリア」という国にいたときに、パレスチナの過激派グループの窓口で、本格的に仕事をやっておりました。もちろん嫌でした。怖いです。どういうところかという、暴発したために指がないおじさんとかいっぱいいて、入るとき身体検査とかされて怖いんですが、まあ定期的にこういったコンタクトをしておりました。それを通じてテロリストは、だいたい2ヶ月に1回、イスラエルに対して、自爆テロを行つてきた。このおじさんのところに、1ヶ月2ヶ月行くうちに、一等怖い人たちなんです、いつの間にか人間関係つて、やっぱり怖い人でもできるんですよ。で、冗談が言えるような仲になつて、そのときに私は言いました。「おじさん、そんなにイスラエルが憎いなら、ちんたらちんたら2ヶ月に1回テロやつてないで、毎日やりやいいじゃないか」自分で言つてて恥ずかしいんですが、そうしましたらこの人に怒られました。「おまえ、人の命はそんなに軽くない。」テロリストに怒られたわけじゃないけれど、そして、彼にこう言われました。「君ねえ。自爆テロリストつてそんなに簡単にできるもんじゃないよ。まずそもそも社会に排除されて、恨みを強く持つている人。可能であれば若い人。そして、彼を徐々に仲間に入れ、洗脳をしていく。そして洗脳をしかるときは、死へのスタンスを植え、訓練をして、そして現場に行く前にこう言います。『君が死んだあと、あなたの親せき連中はしっかりと面倒を見てあげるから、頑張つて死んでこい。』で彼らは送り出す。ところがこの若い自爆テロ候補は、途中で怖くなって帰つてき

ちゃうんです。お母さんの顔が浮かんで帰ってきちゃう。これが人間だよ。」と。まさに、そのとおりなんです。現実どこにこんなテロリストが、すぐにでもできるということは、とても怖いことです。やはり一番最初に、歪んだ社会、もしくはこれを支えるような貧富の差。あるいは社会的な差別。こういうところがあることが、絶対条件。そうじゃないと、テロリストというものは、必ずしも作れない。自爆テロリストというものは作れない。そんなことで言っていくと、ファールージャと書いてあるんですが、イラクのバグダットこの首都が、この首都の西側に、ファールージャという街があります。この街で最終的に反米闘争の拠点ができ、そこでアメリカといわばテロリストもしくは抵抗勢力との間の激しい戦闘が起きた。これ最初はそうはならなかった。徐々に、2003年の戦闘中、ファールージャはアメリカ軍によって解放されました。そのとき人々はアメリカ軍の所へ行って、「ありがとう。サッダームフセインから解放してくれてありがとう。」ところがこのすぐあと、水がない。飲み水がない。薬がない。礼儀がない。こんな状況の中で人々は「水よこせ！子どもが死んでる。兵器よこせ！」ところがアメリカはこれに対して力で抑えた。デモが毎日続く中で、2003年の4月、アメリカ軍の1人の兵士が、恐怖に駆られてマシンガンで乱射した。13人のイラク人が殺された。それからデモはもっと激しくなった。「冗談じゃない、水よこせ！水よこさないんならアメリカ軍出てけ！」このデモが、1ヶ月近く、とうとう一人目のアメリカ兵の被害者が狙撃によって殺されることになった。これがファールージャの全てです。そしてこのファールージャの近郊では、2004年の4月に日本人の若者たち5人が拘束をされる事件が発生しました。覚えてらっしゃるかと思いますが、高遠菜穂子さんという方、彼女も名前覚えてらっしゃるかも知れませんが、彼女たちが拘束されました。ところが、日本人5人、不幸中の幸いでしたが、一人も亡くなられてません。解放されるということになりましたが、そのとき、部族勢力が、アメリカ軍が掃討作戦をしていた。頭に血がのぼっちゃった。「よし、じゃあ外国人を片っ端から人質にとってやる！」そして日本人5人が拘束された。このとき2004年4月の1ヶ月間で拘束された外国人は、81人いました。このうち、何人ぐらい殺されたと思いますか？たぶん印象と違うと思うんですが、2人しか殺されていません。79人解放されてるんです。つまり、あの時は、頭に血がのぼった部族の人が、人質をとった。少し落ち着いたら解放してくれたんです。日本人のパターンもそうです。しかも高遠さんにはこういうメッセージを残しました。「悪かったね。あなたは人道支援してくれてるからありがとう。」そんなメッセージまで残して解放してくれたんです。そうすると、もちろん誘拐・拉致犯を肯定することはできませんが、それでもまだ、生ぬるい人たちでした。ところがそれが1ヵ月後の2004年5月、同じ地域で、また拉致事件が起きるんですが、状況は全く変わります。掴まった人は、首をはねられ、その画像がインターネットなどによって流される…。どこが違うか。やってる人が違うんです。2004年4月の人たちは、地元の部族の人たちが、頭に血がのぼって人質をとった。ところがこの場合には、これを支援する「ザルカウィ」という過激な外国の勢力が入ってきた。いわゆるテロリストたち。この人たちは、地元の部族のやってることを「これはいいわい。あれを俺たちも真似しよう。」ということで、同じことをしちやっった。同じ

じゃなかったのは、こっちは人は確信犯で、最初っから見せしめで殺すことをいとわない。話はそれで終わりではありません。2004年4月、5月、7月くらいになると、ますますアメリカは力でファッルージャを抑えようとし、最初の部族勢力のやり方一つ一つに学んだテロリスト。こちらの部族のほうも、今度はこのテロリストのやり方を真似ていった。徐々に過激なやり方を真似て。これまで違ったのに、部族勢力が、どうやら人質をとったらしいのに、首はねられちゃう。こんな状況なんですね。そこに至って、もはや地元の部族勢力とテロリストという言葉はなくなって、「反米武装勢力」という、一つの言葉で、彼らは呼ばれるようになりました。

そうなるとうしようもない。地元の人とテロリストが融合しちゃった。そうなるアメリカ兵も、どう、想像してください。和光市全員テロリストだとしたら、誰がこれを抑えられるでしょう。そういう状況にファッルージャが陥ってしまう。そうなる、世界最強のアメリカ軍でも、どうにもならない。

そしてこのやり方って言うのが、実はこのうちの一つの組織が、「アルカーイダ」という組織。アルカーイダというのは、ちょっとこちらに英語で書いてみましたが、“Tanzim al-Qaidat al-Jihad” もともと正式名称を「タンジーム・アルカーイダ・アル・ジハード」といいます。その中の真ん中の、アルカーイダをとって、我々は、アルカーイダ、アルカーイダと言っているんですが、もともとの組織名は、「タンジーム」これは「組織」、「アルカーイダ」は「基地」という意味です。そして「ジハード」というのは「聖戦」。つまり、「聖戦の基地組織」というのがアルカーイダの正式名称。この中の重要なポイントは、「アルカーイダ」…「基地」

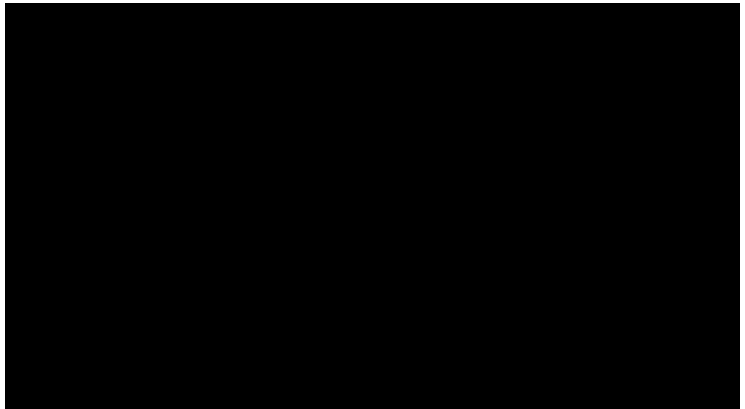


なんです。つまり、不満があるところ、あるいは外国にテロの細胞を植え付ける。そこで、戦争をしそうなようなやり方を教えて、徐々にその国やその地域で、その種を、それから基地、そしてテロを行うというのが、アルカーイダの戦術です。現実にも日本にもアルカーイダのメンバーが入っていたのはご存知でしょうか？新潟県の新発田市というところで、アルカーイダ系のジュノというフランス国籍の人が入ってきた。しかし日本では、今のところいいことだと思いますけれども、社会がそこまで混乱というのはしてない。好き好んで自爆をやるような人がいなかったために、基地ができずに、彼はあきらめて、組織を作れず日本から出国しているわけでありませう。

さて、このように、実はテロをやるためにはアルカーイダといい…他のテロリストも同じですが、組織を作るために、不安定な社会というものが、きわめて重要であるといえるのだと思います。そういうことを考えると、我々は今、テロリストが大きく広がってしまったときに、アメリカ軍ができないのであれば、日本の自衛隊にしても、他の軍隊にしても、たぶんテロリストを抑えることはできない。しかし、テロリストを生み出す根っこを作らないことはできるはず。社会が安定化していれば、これはテロリストにとってはきわめて重大なもしくは深刻な場面。そういったことがお

そらく重要だと思います。また、宗教、社会を、人間を差別しないためにはきちっとしたイメージというものを持っている必要がある。我々が正確に特定の地域で起こっている事態を理解している。それは当然すぐには、火はつかない。正当な批判を集めざるを得ない。

例えば、こういったものがあります。さっき私、5人の日本人が人質になった時に、高遠さんの話をしました。彼女は拘束されて人質になりました。そして最後は、テロリストにこういうこと言われて放された。「あなたは人道復興支援をしてくれてありがたいことだ。ごめんなさい。」と言った。さてこの部族、何をしていたグループか、何をどう要求したでしょう？自衛隊がイラクから撤退を。ところがよく考えてみると、自衛隊がイラクに何をしたのか。人道復興支援をやっていた。高遠菜穂子さんと確かに全く同じじゃないかもしれませんが、高遠さんがやるよりもはるかに大きな復興支援を自衛隊はやっていた。にもかかわらず、軍隊という名前で、あるいは正装してる人たちは「お前ら出てけ！出て行かないと人質を殺すぞ！」と言われ、片一方は、「どうもありがとね。」と言われ。中身は似たようなことやっても相手の答えている兵士によって、180度違うことをテロリストたちは考えていることになります。先ほど日本人が標的になっている、イラクでは部族闘争、ソビエトとレバノン、それはとんでもない。たぶん、我々がヨーロッパ、中東、アメリカあたりを旅行しているときに、その辺にテロリストがいたら、日本人は格好のターゲットになる。それは、日本人が思っているのとイメージが違う。それか、また、全く違う結果が生まれてくる可能性が大いにありえるということが言われてきているわけでありまして。さらに、三つ目にはさきほど私が、社会が不安定だと、テロリストたちはここで組織を作ることができるようになる。このように申し上げました。これを作らせないために、政府は、ある。アメリカ軍が今、イラクで掃討作戦を行っていますが、実はこれ、うまく



いってない。アメリカ軍が掃討作戦をやると、テロリストは四方に逃げる。そしてアメリカ軍は殺せないけど、他のもっと弱いやつらを殺す。掃討作戦が、今2月の下旬からもはや5ヶ月くらい始まっています。6月くらいからずーっと行われてる。これが成功しないと来年の大統領選挙戦に、特に今年は出馬情勢、つまり、各地の大統領候補の決まる選挙が2月15日から、相当早い段階で、大統領選挙戦が始まっていくわけですが、その前にやっていく最後の切り札が掃討作戦。これうまくいっているかどうかみると、必ずしも、現時点ではうまくいってない。ちょっとこれ見てみますと、さっき申し上げましたが、掃討作戦をやっているところからは、テロリストは逃げています。そうじゃないところで殺しあってるやつを殺します。ところがイラク人の死んだ数では、去年の12月から2月の下旬…つまり、掃討作戦前と2月下旬から5月の末を比較したところ、掃討作戦をやっている地域は、このバグダットという首都と、スンニ派が住んでるこの二つです。こ

う見てみると死者数なんですけど、あんまり数字の上では変わってませんが、バグダットでは死者数が3分の2になっている。つまり、効果がある。ただし、掃討作戦だけでしかない。それ以外の地域ではどうでしょう。ニノワ、キルクークという北部では、死者数が倍になっています。バスラでは、これは、数は少ないんですけども、3倍以上になっています。そして、その他のシーア派地域も1.7倍程度に死者数は増えてます。ということは、今までもパターンはあまり変わらない。つまり、掃討作戦をやっている間、やっている地域はよくなるけれども、またそれが終わるとテロリストが戻ってきて、そして、テロ、爆弾テロという今までのパターンに戻る。それが今。

日本でテロリストというのでしょうか？オウム真理教の事件が、認証度が強い。組織がものすごく大きくて、準備万端で、高度な技術をもってやるのが、テロと思われているふしがある。ところがイラク、他のところもそうですが、だいたい、この間のイギリスのテロもそうです、だいたいほとんどのテロは、技術的にはきわめてシンプル。たとえば、イラク戦争のときの、その辺の不発弾、地雷とかアメリカがうったクラスター爆弾の不発弾を受け入れるよ、持ってきたら、一個当たり5千円あげるよというところ、そして、それを缶かんに入れる、中に釘とかガラスとか入れて、線をつなげて、仕掛け爆弾を作る。こういうシステムなんです。全然技術を極めてない。だからこそ根絶できない。簡単なんです。誰でもテロリストになる可能性が出てきてしまう。ところが、手口だけは巧妙になってきている。

最近イラクで自爆テロ、自動車による自爆テロが起こった直後、発見されるものがあります。それは、ハンドルに縛り付けられている。それはどういうことか。イラクではいまだにほぼ毎日のように人質虐殺が行われている。バグダットでみると、自分たちの親戚の中で人質がとられたことがない人はいないといわれています。人質事件は起きている。そんな中で、人質をとる、その人質、身代金、1千万で解放します。開放するとき、「おまえ、解放してあげるから、お前が乗ってきた車に乗って、そのまんま警察署に行って、解放する。」という風に指示をする。そして犯人グループは、手を、ハンドルの上にくっつけて、ぐるぐるに縛る。「じゃあ！」といって追い出したあとの車のトランクにはお土産がはいっている。多量の爆弾。そして、指定された警察署にその車が入ると、目の前で待っていた仲間がリモートコントロールボタンで、車ごと警察署でその人を殺して、結局ハンドルには手首だけが残る。今、そういう事件が起きている。つまり、やっていることはシンプルなんですけど、手口は巧妙化している。狙われるとなかなか避けにくい。方法はないといったところになります。

このように考えてくると、単純に力だけで抑えようとしたアメリカの戦略は逆にテロを助長し、もしくは抑えられない状況を作り上げてしまった。その一方でわれわれがもしかすると違うやり方で、テロリストを作ることを阻むことができるか。

その二つ、日本がうまくやっているかというところは私はかならずしもうまくいっていないと思う。

たとえば、今年防衛庁が防衛省に昇格をいたしました。その時に、あれがいい悪いは別にして、私は与党の先生も野党の先生も両方とも正直言って失望しました。今の状況にはたして合っている

かどうなのか？というのは、今のわれわれの脅威、一番最初に申し上げましたが、前線があって、全面的に戦車と戦車がぶつかるような戦争を起こすことをあまり考えていない。北朝鮮とかそういうところがありますけれど。たぶん飛んでくる核だったり、ミサイルだったり、あるいはテロ、こういったほうが「脅威」としてあがってきている。そんな中で、「核」「ミサイル」「テロ」といったものは軍事力だけではおそらく封じ込めることはできない。日本がもし、日本が持っている武器以外はすべて危険だとみなして、すべての国に戦争を仕掛けてやっつけるというやり方はあまりにも現実離れしている。それよりも、たとえば、北朝鮮の核、ミサイル、イラクとか中国とか、撃たせないためにどうするか。例えば、外交的な交渉というものがある。あるいは北朝鮮の場合にはODA、経済支援までもが、ミサイル核問題に絡んでいる。核やテロの問題もそう。相手の国が反省すること、不満がある人間が出てこないことが大事だとする。防衛が密接に今外交やお金や経済と絡んでくる。と考える。だとすると、防衛庁だった当時、幹部に「日本ではどのような状況が」と問うた。そのような意味で、与党の中でも野党の中でも名前はいませんが、何人かいる先生が「いや～、自衛隊よくやってるから、防衛庁を防衛省にしてやるべ」なんて議論をした。防衛庁はやっぱり自衛隊がよくやってる話と、防衛庁が防衛省になるという話とは関係ないんです。ところが、考えるときに先ほどおっしゃいましたけれど、防衛庁の組織というのはご存知でしょうか？内閣府つまり総理の下に直結していたんです。組織上。それが離れて、独立する。私が当時思っていたのは、防衛庁は内閣府の下で、総理が更迭者、現実には別としても組織上は、そちらのほうがより現代に合っている。世界でもっとも優れたシステムをもしかすると日本は持っているかもしれない。それが、他の国と同じように、イラク戦争がうまくいった時、更迭されたラムズフェルド長官をご存知でしょうか？あの方が、更迭が決まった二日後こう言ってました。「イラクにおける失敗のおおきな原因のひとつにアメリカの縦割り行政。われわれ国防総省はいくらでも戦う。だけど、国務省や外務省はそうではなかった。これでは、今の戦争は戦えないんだ」と。まったく逆行しているように私には聞こえました。少なくともそういうように。でなかったら、安全保障を見直すための国会議員。そう意味では与党も野党も共通です。そういう意味では私は非常に大変残念です。

あるいは、戦闘テロと社会、一見してあまり関係なさそうな話ですが、実はテロを作ることと社会は切り離せない。いったん社会がおかしくなってしまうというのは、テロリストがうれしい。イギリスでもアメリカでもフランスでも大変な苦勞をしている。相手の国を落とせない。落とす国がない。それは今の政治の社会の目的からすると異常。たとえば、われわれができることはいっぱいあるんです。実は今日会場に来ていただいているんですが、和光の方々にお願いをして、ライオンズクラブというところにとりまとめをしていただいて、お金を集めて、イラクのサマーワというところに、孤児院を作る活動を2年ほど継続し、去年その孤児院が完成しまして、和光の方にたくさんのお金をいただきました。それを何故やったかという、孤児がかわいそう、戦争でごたごたしている、それはそのとおりなんです、実はそれだけではなく、孤児の人たちがどうなっているか？ということをちょっとお話したいと思います。イラクはもともと部族社会、部族社会というのはた

たとえばオード一部族。そのオード一部族というのは部族以外の孤児を「私はその孤児を知らなくても引き取る」とは絶対に言わない。同じように、もし、オード一部族の人間が孤児院に入っているとしたら、他の部族の物笑いの種だといって、全部連れ帰る、オード一部族で孤児院になど、入れられない。そこで、イラクはもともと孤児院はほとんどなかったんです。というのは、孤児院を作っても入る人がいない。それまで孤児がどれくらいいたかというところと1980年から88年までイランイラク戦争、そして1991年湾岸戦争、空爆から始まるイラク戦争、ずーっと戦争をやっています。孤児はいっぱいいます。だけどこれらの孤児はそれぞれの家庭に引き取られていた。ところが、1990年にイラクに経済制裁がかかると、みんな貧乏になる。どのくらい貧乏かというところ、イラクは相当豊かな国なんです。石油も出るし、それが徐々に貧乏になっていって、最悪な人はこういわれています。たとえば、家にあるもの、靴を売って家具を売って、最後に売るのは水道の蛇口。水道も止められちゃっているから、必要ない。最後に売るのが水道の蛇口。それを売るような状態に陥る家が出てくる。それがイラク。もちろん、ここに至る前の段階ですけれども、ある日こう言います。「お兄さん悪いね、お姉さん悪いね、あなたのことを助けようと思って引き取って、子として育ててきたけれど、やっぱりうちではもう無理。悪いけど、自分でご飯は食べておくれ。うちはこういう状態だからわかるでしょ」と言って、今までたくさんいた孤児がたくさん家庭から出てきた。孤児院がない。孤児院を作っても誰も入らなかったから。さて、この子はどうなるか？まず、今の現状に不満を抱く。「なんで俺がこんな風にならなければいけないんだ？誰が悪い？サダム・フセインか？アメリカか？国連か？なぜ、こんなつらい目にあわなければいけない？」そしてそこに、声をかける人たちがいる。「お兄さん、ちょっとおいで。100\$あげよう。僕たちの仲間になればいいことがあるよ。お金がもらえるし、イスラムのために死ぬるし、今、君がこのような状態に置かれている原因のひとつのアメリカ兵を殺せるし。さあ、一緒に正義の地へ行こうじゃないか！」子供たちは強い大人と一緒にテロリストの手下になる。そして、このテロリストの手下にいったんはいつてしまうと、自爆テロを行うまで、足抜けできなくなる。それが、イラクの現実の話です。

僕たちがお願いをして、和光の皆様からお金を戴いて、作った孤児院は小さなものなのですが、それでも、多少の足しにはなるかもしれません。そして、社会が安定していると、先ほど、申し上げましたが、もともと安定している社会にはテロリストは入れない。と同様に、おかしくなった社会を安定させることが、実はテロリストたちを困らせる一番いい仕事、われわれが遠くにいてできることではないかということが私の考えです。それに基づいて、孤児院を作ったわけでありまして。まだまだ小さなわっかですが、そのわっかは、徐々に大きくなって、それがいつかイラクの今日につながる。

そして、もうひとつは、先ほどイラクには宗派にもともと対立があったという話をした。確かに、スンニ派の人はもともとシーア派の人を自分より下だと思っている。シーア派の人は逆にスンニ派の人を自分たちよりも下だと思っている。このような話があるのも事実。しかし、それが理由で殺

し合いにまでは行かなかった。ところが最近では、それがおかしくなっている。私の知り合いの場合には、40年間その人は、シーア派の人と連れ添ってきたスンニ派でした。そこへ親戚連中がぱっと来てこういいました。「お前のところに女房はシーア派だったよな。俺たちの親戚の何人がシーア派に殺されてきたと思う。そんな女房は離縁しろ」といって、親戚連中はよってたかって、その人を離縁させてしまった。そうすると、もともと、さきほど宗教戦争はないと私はいいましたが、政治が宗教を利用していたと。ところが、この宗派对立が徐々に徐々に社会に浸透していってしまう。そうすると、最初は政治的であったものが抜き差しならない対立になっている。始まるころがないのに、終わりがなく、それが、今のイラクの現実。

そして、最後にもうひとつ申し上げると、あれは何日前でしょうか？サッカーのアジア大会、アジアカップでイラクの108人が優勝しました。あの時、私の友人のイラク人が、「イラクの108人がアジアカップ優勝してよかった。なにがよかった、あそこには、クルド人、キリスト教徒、イスラム教徒、シーア派もスンニ派もいた。みんなが、ひとつの目的に向かって戦った。そして、同じ思いを、あと何回、アジアカップでわれわれは戦って優勝する度に、そんなことは特別なことだと思わないようになれるのか？」というメールを私はもらいました。でも、そうになってしまう。テロの存在や社会の不安定で。

そう考えると、今日の主題でございますが、「戦争」や「不安定」を考えると、特に「新しい脅威」としてのテロを考えると、われわれは「今の日本」という恵まれた環境に暮らすことをありがたいと思わなければいけません、その一方でわれわれの社会、果たして、安定していてテロリストの流入を許さない社会である、もしくは子供や孫の代まで、これを許さない社会であり続けられるかということはどうしても考えなければならない。

「軍事力」、「防衛」、「組織」、こういったものは当然必要かもしれない。それに対して、がんばっている方々もいるかと思いますが、徐々に新しい脅威に取り組むために、政治や経済に加えて、もしくは社会的なボランティアというものがはたして、どこにあるのか？ということ、実はもう一度考える。今の「世界の脅威」に重要なのは、第二次世界大戦が終わったあと、日本は反省をして、戦争を放棄する。しかし、当時と違う脅威がある。今後の日本がもし、平和というものを真剣に考える時、世界の中でリーダーシップを発揮したいと思うのであれば、やはり、今の脅威、その脅威を封じ込める方法というものを真剣に考える機会が、そろそろ来ている、少なくとも日本でそんなテロが起きる前に考える必要があるのではないかと私は強く思って、今日の皆様へのあたたかいとはいえないですが、メッセージにさせていただきたいと思っております。

今日、一番冒頭に「拷問」と申し上げましたが、そろそろ、「拷問」も終わりの時間になりました。とりあえず、この後、ご質問等は受け付けますが、私のプレゼンテーションはこれで終わりにしたいと思います。

～ 拍 手 ～

司会：それでは、せっかくの機会ですので、会場の皆様からご質問を受けたいと思いますが、大野さん、よろしいでしょうか？

大野さん：はい

司会：どなたかご質問される方、いらっしゃいますか？

質問者：アルカイードに対する、支援的な国はどこかあるのでしょうか？

大野さん：ありがとうございます。それはすごく難しい問題で、というのはアルカイードが誰かわからない。もともと僕らはビンラディン率いるアルカイードはアフガニスタンのアルカイードはよくわかっているんですが、最近、アルカイードはフランチャイズ化している。たとえば、アルカイードのビンラディンの下のNO. 2のアイガッタ・ワディという人がいるんですが、この人はもともと、エジプトのジハーディア、この辺までは組織ははっきりしているんですが、イラクのザルカウィという人はもともとアルカイードとは反目していたんですよ。お金、もしくはやりあっている大義名分があるために。モロッコやフィリピンでも同じ、徐々にフランチャイズ化していって、こういう組織があると、思わない感じで。ただし、もともとのアルカイードの資金源としては、おそらく3つがあります。ひとつはウサマ・ビンラディンが持っていた資金。有名なところでは911、テロの直前にたとえば、株を飛行機会社の株を空売りした。それから、自分がテロを起こすとその株は急落した。その差を儲けて資金源とした。そういったやりかたをした。ある意味、非常に現代的な手法。

そして、二つ目に、彼ら自身がいくつかの利権を持っていた。たとえば、一部のアフリカ諸国の鉱石（宝石）、ダイヤモンドなどを買い受けてきた。それを市場で売った。そういったトレーダーをして、お金にした。

そして、三つ目には義援金、この義援金の中に、つらい思いをしても、われわれはテロリストになるんだという人が全国にいた。その人たちから流れてくる義援金が、たとえば、ちょっと裏切られるような面があるということは、それはみんなおなじなんだと、それをはっきりしてやったのが、お金があると思うようにする事。そこから人間が自分でお金を持った。それを、その地域に戻す、そういうやり方でお金が流れていくようになった。

他方で、先ほど申し上げたとおり、組織がフランチャイズ化されて、もともとちゃんとされてない。こっちが勝手にやっているというのが、最近の、特に非アラブ世界のアルカイードのやり方になってきている。その上先ほど話したように、日本の新潟の新発田市でアルカイードが潜伏していましたが、彼が日本を出る時言った失敗の原因のひとつに「日本は物価が高すぎて、アルカイードの組織を作るためには、なかなか予算が作れない。」

なかなか非常に俗世的な話なんですけど、テロもお金次第、というところがあるという事も事実と私は考えます。